

『世継物語』注釈（八）

本稿は、本紀要第五十三号に掲載した『世継物語』注釈（七）の続編である。前稿で『世継物語』の三系統諸本（①世継系統本②宇治拾遺系統本③宇治大納言系統本）のうち、①世継系統本②宇治拾遺系統本に収録されている全五十六説話と①②両系統本と共通する説話を持つ③宇治大納言系統本の所収話のうち①②両系統と共通する説話の本文翻刻と注釈は終了した。今回は、③宇治大納言系統本にのみ見られる四説話について本文翻刻と注釈をする。

次に③宇治大納言系統に分類される伝本の特徴を記す。

宇治大納言系統伝本は、いづれも上・中・下三巻、全五十四話を所収する。①世継系統本②宇治拾遺系統本収録の第八話・第十二話・第三十三話・第三十八話・第四十一話・第五十五話の計六話を欠き、新たに『十訓抄』から四話増補したとされている¹。説話の配列においては、①世継系統本②宇治拾遺系統本とは、異なる。本文においても長文の脱落や増補がある²。また、本系統の諸本には、必ず次の奥書を巻末に付帯して

いる。

写本云

有宇治拾遺行世這箇物語未有鏤梓是

故乞仮或家所秘之本使満直膳間多舛

差只追陶靖節之遺風不求甚解暫俟侘

日要考同異云爾

本系統諸伝本は、写本としては、内閣文庫蔵坊城俊親奥書本、岡山大学図書館池田家文庫蔵土肥家本、京都大学文学部国文学研究室蔵伴信友本、慶応大学図書館蔵滋野井公麗自筆本、宮内庁書陵部蔵葉室家旧蔵本、静嘉堂松井文庫蔵緑竹軒自筆本、多和文庫蔵伊勢貞文識語本の七本がある。写本のうち京都大学文学部国文学研究室蔵伴信友本は、無刊記版本を臨写したものであり、静嘉堂松井文庫蔵緑竹軒自筆本は、天明六年版以後の版本を書写したものである。

版本としては、（イ）無刊記版本、（ロ）天明六年版本〔無刊記版本を補刻・本文を校訂をして、再刊の事情を語る序文「兎道大納言物語序」、

白石美鈴

「高藤系図」を加えて刊行した。天明六年勝村善兵衛版本、天明六年書肆無記載版本、天明六年河内屋八兵衛版本の三種がある）、（ハ）天明六年版の後刷版本（文政七年山城屋佐兵衛版本、天保四年秋田屋市五郎版本、天保六年秋田屋市五郎版本、天保十一年書林仲間版本）がある。

凡例は、今までの注釈に準ずるが、次の如くである。

凡例

- 一、本稿は、本文、校異、通釈、語釈、参考からなる。
- 一、本文各話には見出しになる話の題目は底本にないので、私意により、各話の前に◇◇で括って見出しを掲げた。その折、『世継物語』の最後の第56話のあとに、①②系統本には、見られない説話を四話については、③宇治大納言系統所収順に、第57話、第58話、第61話、第62話と通し番号を付したが、これらも底本にはない。
- 一、本文は、架蔵本版本『宇治大納言物語』を底本とした。当本は、天明六年刊大阪書房河内屋八兵衛版本である。
- 一、対校に用いた諸本とその略号は次の通りである。

宇治大納言系統本

渡―無刊記版本宇治大納言物語（慶応大学図書館蔵渡辺文庫本）

公―慶応大学図書館蔵滋野井公麗自筆本

土―岡山大学図書館池田家文庫蔵土肥家本

葉―宮内庁書陵部蔵葉室家旧蔵本

坊―内閣文庫蔵坊城俊親奥書本

伴―京都大学文学部国文学研究室蔵伴信友本
竹―静嘉堂松井文庫蔵緑竹軒自筆本
多―多和文庫蔵伊勢貞文識語本
宇―右記宇治大納言物語系統全諸本

一、底本の翻刻については次のような方針をとった。

- 1、本文は読みやすくするために、適宜、段落にわけ、句読点および濁点を付した。会話の部分にカギ括弧を付けた。また、読みやすさを考えて、幾つかの段落にした。
- 2、底本の異体字などは正字体に改めて統一した。
- 3、底本の仮名は通読の便を考慮して、適宜、漢字に改めた。また、片仮名は平仮名にした。
- 〔例〕 　つらゆき↓貫之　　あらば↓あらば
- 4、仮名づかいは、歴史的仮名づかいに統一し、底本の仮名づかいは、そのまま、本文の右に振仮名として残した。
- 〔例〕 をおのづから
- 5、送り仮名や助詞などを新しく付した場合には、その右わきに・印を付した。
- 〔例〕 　侍める↓侍るめる
- 6、底本のあて字には、正しい漢字を本文とし、その右わきに、付した。
- 〔例〕 魂たま
- 7、反復符号「々」「々々」「／＼」は、底本のままとした。
- 8、底本の原文に、傍書・注記があるものは（ ）に入れて、本文の右に付した。

一、本文の改訂、補入および校異に関しては次のような方針をとった。

1、底本の本文を尊重し、誤りのある場合もなるべく底本のまま残し、校異、語釈の項で、その旨を説明する。しかし、全く意味をなさない所は、本文を訂正した。

2、底本の本文に脱字・脱文があると認められる場合には、本文を（ ）に入れて補い、校異に記した。

3、校異の作成に当っては、次の方針をとった。

(1) 語句の異同、仮名つかいの相違、仮名表記と漢字表記の相違・注記などを記した。見せ消ち・訂正部分は、該当箇所在校異の項に記した。

(2) 上に底本の本文を掲げ、下にそれに対する異文を挙げて、諸本の略号を付した。ただし、底本の本文表記の変更や誤脱があつてそれを訂じた場合は、訂じた本文を上に掲げ、その下に底本の現状を説明した。対照の便宜上、本文中の校異欄の見出しとした語句には、その右肩に、各話ごと1、2、3 ……の通し番号を付した。

(3) 底本にない部分を諸本が持つ場合は、本文中に*印をつけ、校異・語釈の項で説明した。

一、本稿を成すにあたり、先学のご著書・ご論考を通じて多大の恩恵を蒙った。常に参照した注釈書は、次のものである。

日本古典文学大系・新日本古典文学大系・日本古典全集・新日本古典全集・新潮古典集成所収本（大和物語、枕草子、源氏物語、大鏡、栄花物語、今昔物語集、紫式部日記、俊頼髓脳、後撰和歌集、後拾遺和歌集、和漢朗詠集、宝物集、十訓抄等）

『後撰和歌集の研究』（佐藤高明著昭和四十五年日本学術振興会）

『栄花物語新注』（河北騰著昭和四十五年笠間書院）

『古事談』上下（小林保治校注昭和四十六年現代思想社）

『栄花物語全注釈』三（松村博司著昭和四十七年角川書店）

『枕草子全注釈』（田中重太郎著昭和四十七年角川書店）

『校本大和物語とその研究』増補版（阿部俊子著昭和四十九年三省堂）

『大鏡全評釈』（保坂弘司著昭和五十四年学燈社）

『今物語・高房集・東斎随筆』（久保田淳・他校注昭和五十四年三弥井書店）

『全唐詩』（一九七九年中華書局）

『新版枕草子』（石田穰二訳注昭和五十四年角川書店）

『大和物語の考証的研究』（森本茂著昭和五十五年和泉書院）

『古事談』上下（小林保治校注昭和五十六年現代思想社）

『枕草子解環』（萩谷朴昭和五十六年同朋社）

『大和物語の注釈と研究』（柿本奨著昭和五十六年武蔵野書院）

『日本漢文学大辞典』近藤春雄著昭和六十年明治書院）

『栄花物語標注』（本位田重美編昭和五十七年笠間書院）

『栄花物語の研究校異篇』（松村博司編昭和六十一年和泉書院）

『枕草子』（増田繁夫著昭和六十二年和泉書院）

『重之集・子の僧の集・重之女集全釈』私全集全釈叢書（目加田さくを著昭和六十三年風間書房）

『白氏文集』三 新釈漢文学大系（岡村繁著昭和六十三年明治書院）

『後撰和歌集全釈』（木船重昭著昭和六十三年笠間書院）

『後拾遺和歌集』（川村晃生校注昭和六十六年和泉書院）

『後拾遺和歌集全釈』（藤本一惠著平成五年風間書房）

『大和物語全釈』（森本茂著平成五年大学堂書店）

『十訓抄全注釈』（川村全二注釈平成六年新典社）

『後拾遺和歌集新釈』上下（犬養廉・平野由紀子・いさら会著平成八年笠間書院）

『大和物語の婚姻と第宅』（新田孝子著平成十年風間書房）

『大和物語評釈』上下（今井源衛著平成十一年（上）・平成十二年（下）笠間書院）

付記 先年来の伝本調査をお許し下さった各文庫・図書館・諸本所蔵者の各位に厚く御礼申し上げます。

◇ 57 藤原のまさちか（惟規）の臨終の事 ◇

1 今は昔、藤原のまさちかは世の好き者にて侍りし。父の越後の守為時に伴なひて、彼国へ下りけるほどに重く煩ひけるが、

9 都にも恋しき人のあまたあれば猶此度はいかんとぞ思ふ

14 と詠みたりけれども、いと、限りにのみ見えければ、父の沙汰にて、或

18 山寺より、徳ある知識を呼びたりけるに、中有の旅のありさま、心細き

やうなど語りて、「是にやすらはで、すぐに浄土へ参り給へ」など言ひ聞

せけり。

まさちか「中有とはいかなる所をや」と申せば、「夕暮れの空に、²⁷広き野に行出たる様にて、²⁸知れる人もなくて、²⁹たゞひとり心細く迷ひありく也」と答るを聞きて、「其野には、³⁴嵐にたくふ紅葉、³⁵風になびく尾花がもとに、³⁸松むし鈴むし鳴くにや。さだにもあらば、⁴⁰何かは苦しからん」と

いへる。

12 是を聞きて、あひなく心づきなく覚えければ、僧、逃げ走りにつけり。

51 此歌の終はりの「ふ」文字をば、⁴⁸え書かざりけるとかや。さながら都へもて帰り、⁵²親どもいかに哀れに悲しかりけん。⁵⁴

「校異」 1 今は昔—いまはむかし底渡坊伴竹いまハむかし公多今ハむ

かし土葉 2 まさちかは—まさちかハ底渡多公葉坊伴竹政ちかは土

3 好き者—すきものにて侍りし底渡多公葉伴竹すき物にて侍りし土

4 伴なひて—ともなひて底渡多公葉坊伴竹ともなるて土 5 彼—か

の土 6 へ—え土 7 下り—くだりけるほどに多坊くたりけるほど

に葉 8 重く煩ひ—おもくわづらひけるが底渡伴竹おもくわづらひけ

るか葉おもくわづらひけるか多公土 9 都にも—都には公坊 10 ば

—は葉バ渡多公土坊伴葉 11 此度は—此度ハ渡多伴竹此度は土こたひ

ハ公こたひハ葉坊 12 いかんとぞ—いかんとぞ底公坊いかんとぞ渡多

公伴竹いかむとぞ土 13 思ふ—おもふ公葉坊 14 詠み—よみ宇

15 限りにのみ—かぎりにのみ宇 16 見えければ—見えければハ底渡多

公土葉坊竹見えければ伴 17 沙汰—さた底渡多公土葉坊竹さだ伴

18 徳ある—とくある底渡伴竹徳ある多とく有公土葉坊 19 呼びたり

けるに—よびたりけるに底渡伴多公竹よひたりけるに葉坊よひたりける

二土 20 中有の旅のありさま—中有の旅のありさま底渡中有の旅の有

さま公土葉坊 21 心細きやうなど語りて—心ほそきやうなどかたりて

底渡多公土坊伴竹こゝろほそきやうなどかたりて葉 22 是にやすらは

で—是にやすらハで底渡公土坊竹是にやすらははで葉是にやすらひて多是

にやすらはハで伴 23 参り—まいり底渡多公葉坊伴竹まゐり土

24 いひ聞かせ—いひ聞かせ底渡多公土葉坊伴竹いひきかせ葉 25 は—

ハ多公土葉坊 26 夕暮れ―夕くれ坊 27 広き野に行き出でたる―広
 き野に行出たる底渡広き野に行出たる公葉坊伴竹広き野に行給たる土広
 き野に行給ひたる多 28 知れる―しれる宇 29 たゞ―只土 30 心
 細く―心ほそく宇 31 迷ひありく―まよひありく宇 32 答る―こと
 ふる土答ル坊 33 聞きて―き、て底渡多葉伴竹聞て公土坊 34 嵐―
 あらし底渡多公葉坊伴竹嵐土 35 紅葉―もみぢ公もみぢ葉坊 36 尾
 ―「風」をミセケチして「尾」と訂正伴 37 もとに―本に土 38 鳴
 く―なく土 39 あらば―あらバ底多公伴竹坊あらハ渡葉あらは土
 40 何かは―何かハ底渡多公坊伴竹何かは土なにかハ葉 41 苦しから
 ん―苦しからむ竹くるしからん公土坊 42 聞きて―き、て底渡多伴竹
 聞て公土葉坊 43 あひなく―あひなく公葉坊あへなく土 44 心―
 こ、ろ土 45 覚えければ―覚へけれバ底渡公坊葉覚へけれハ多覚へけ
 れは竹おほえけれハ土 46 逃げ走りにけり―にげはしりにけり渡多土
 葉坊伴竹にげはしりけり公 47 歌の終はり―おはり多歌のおはり多渡
 公土葉坊伴竹 48 ふ文字をば―ふ文字をバ底渡公葉竹ふ文字をハ多土
 坊ふ文字をば伴 49 え―え底渡公坊竹「え」ミセケチ「え」伴
 50 書かざりける―か、ざりける宇 51 もて帰り―もて帰る葉
 52 親―おや底渡多公坊伴竹をや葉 53 哀れ―あはれ底渡多公土坊伴
 竹本文には「あはれ」の部分はない。行間に「哀れイ」と傍書がある。
 葉 54 悲しかりけん―かなしかりけん底渡多公葉坊伴かなしかりけむ
 土竹

〔通釈〕 今は昔、藤原まさちかは、世間では好色の人と評判であった。
 父の越前の守為時とともに、越後の国へ下向する途中で重病になった。
 都には恋しい人がたくさんいるので、なんとしてもこの度の旅は、

生きて都へ帰りたと思います。

と歌を詠んだ。臨終を迎えようとなったため父の越後守為時は指図し
 て、とある山寺から徳のある高僧を呼び寄せて、中有の旅の様子、寂し
 い様子を話し、「ここで迷わないで、すぐに浄土へお向かいなさい。」な
 どと言いつけた。まさちかは「中有とは、「中」とは、どんな所ですか。」と尋ねる
 と、僧は「夕暮れの空のもとで広い野原に出でたる様な所です。知つて
 る人は誰もいない世界であり、そこをただ一人心細く迷い歩きます。」と
 返答するのを聞き、まさちかは、「其野には嵐に舞う紅葉や風になびく尾
 花のもとから、松虫鈴虫の鳴き声が聞こえてきますか。そうであるな
 ら、なにが苦しくありませんか、一向にかまいません。」と言う。この
 言葉聞いて、僧は、「無益である。ただもうわけもなくいやだ。」と
 思ったので、走って逃げていった。

「都にも」の歌の最後の「ふ」の字を書き終わらないまま
 まさちかの命が絶えてしまったと伝えられている。そしてそのまま歌を
 都へ持ち帰った親たちはどれほど辛く悲しかったことであろう。

〔語釈〕 ○藤原まさちか 『今昔物語集』卷三十一第二十八話、『俊頼髓
 脳』、『後拾遺和歌集』、『十訓抄』では、藤原惟規とある。藤原惟規の誤
 り。藤原惟規は、天禄三年(九七二)年頃に生まれ、寛弘八年(一〇一
 一)に病死(『作者部類』)。為時の長男、母は、摂津守藤原為信の女。紫
 式部の同母弟、兄との説もある。年少の頃、父から漢籍を教わる時、傍
 らにいた紫式部が覚えがよく父を嘆かせた話、中宮御所に忍び込んだ盗
 賊を捕らえて手柄を立てることなく早々に退出して紫式部を失望させた
 話(紫式部日記)や泥酔して賜祿拜舞の礼をしなかつた等の失敗譚ある。
 寛弘四年(一〇〇七)正月十三日兵部丞兼藏人に補される(御堂関白記)。

従五位下。寛弘八年二月一日、父為時が越後守に赴任した時、老父の身を案じて藏人を辞して随行したがまもなく越後で病死した。公任・具平入集、家集に『惟規集』がある。○越前の守為時 生没年未詳。堤中納言藤原義雄の孫、刑部大輔雅正の三男、母は、右大臣藤原定方の女である。『世継物語』第十六話の撰津守為頼の弟であり、紫式部の父である。

越前・越後守になっている。寛弘八（一〇一一）年二月一日正五位下越後守となり（『弁官補任』）、長和五（一〇一六）年四月二十九日三井寺で出家する（『小右記』五月一日の条）。『本朝麗藻』『類聚句題抄』『和漢兼作集』等に多くの漢詩があり、『後拾遺和歌集』以下四首入集し、歌人としてより文人として名高い。『俊頼髓脳』には、「為善と申儒者の子に惟規」とある。『今昔物語集』本文は「越中ノ守藤原ノ為善ト云ケル博士ノ子ニ惟規」とある。為時は越中守になった閨歴はない。『今昔物語集』該当箇所頭注一には、「倫寧の孫、理能の子。母は清原元輔の娘。ただし為善の子に惟規はいない。藤原為時の誤りか（新日本古典文学全集『今昔物語集二』）とある。○「都には」の歌 『後拾遺和歌集』卷十三 恋三 七六四番。詞書に「父の供に越の国に侍りける時、重く煩ひて、京に侍りける齋院の中将が許につかはしける」とあるように、都の恋人、齋院の中将（齋院長官源為理の女）に詠み送った歌である。当該話以外は、三句は「おほかれば」とある。当該歌は、『俊頼髓脳』には「第一句は、みやこには」、「俊頼髓脳」以外は、「みやこにも」とある。『宝物集』、『十訓抄』一―四五、『醉源鈔』十二ノ下、『今昔物語集』卷三十一第二十八話は「第二句わびしき人」とある。歌の技法では、掛詞を使い、「このたびは」、「度」「旅」を掛け、「いかんとぞ」は、「行かむ」と「生かむ」を掛ける。なお、紫式部は、『紫式部日記』で惟規の恋人齋院中将にたい

して「齋院に、中将の君といふ人はべるなりと聞きはべる、たよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人のとりて見せはべりし。いとこそ艶に、われのみ世にものおゆゑ知り、心深き、たくひはあらじ、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひてはべるべかめる。見はべりしに、すずろに心やましよう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふように、にくくこそ思つたまへられしか。文書きにもあれ、「歌などのをかしかたむは、わが院よりほかに、誰か見知りたまふ人のあらむ。世にをかしき人の生ひいでは、わが院こそ御覧じしるべけれ」などぞはべる。」と辛辣な記述をしており、快く思つていなかったようだ。○知識 善知識。高德の僧が臨終に際し、念仏を唱え極楽往生へ導くこと。○中有 中陰と同じ。仏説で、衆生が死んで次の生を受けるまでの間。七日あるいは、無限というが、四十九日の間。次の生が決まるまでを旅にたとえて中有の旅という。○たぐふ 「類ふ・比ふ・副ふ」一緒になる。ともなう。連れ立っている。寄り添う。並ぶ。○さだにもあらば そうでさえあるならば。○あひなく（あいなく）形容詞「あいなし」①意義がない。いわれがない。無益である。②心にみたくない。不本意だ。おもしろくない。あんまりだ。ここでは、①の意味で解する。惟規の執着ぶりに善知識は、臨終念仏へ導くことは無理であると判断した。○心づきなく いやだと思う。不愉快になる。○都へもて帰り 為時は長和三（一〇一四）年六月十七日越後守を辞し（『小右記』）、都へ持ち帰った。

【参考】 本話は、惟規は臨終に際してなおも死語の風雅を願った説話である。本話の伝播については、源経信著『難後拾遺』には、「ち、のともにあちごにまかりけるにあふさかの關をこえて爲善がもとにつかはしける 藤原惟規 あふさかのせきうちこゆるほどもなくけさは都の人ぞこ

ひしき まつはとこそき、たまへしか。さてはまさるらんものを。これはためよしがかりしは、のぶのりがこのうたをよみておこせて侍しかへりごとを、えちごにつかはしたりしに、のぶのりはうせて、ち、ためよしが返事をいとあはれにかきつけて侍し、いまにうしなはではべりしとこそ申めりしか。」とある。この点より源経信は、親しい為善から詳細な惟規の臨終の様子と父為時の手紙について聞いており、この惟規の臨終の様子は、源経信からその子源俊頼に伝えられ、『俊頼髓脳』に収録されたとの指摘がある(湯之上早苗「教奇と求道(四) 惟規説話と俊頼髓脳」『文教国文学』第十五号昭和五十九年九月、鈴木徳男「惟規説話の伝承——『俊頼髓脳』と『今昔物語集』の關係——『相愛国文』第十三号平成十二年三月)。以上の推測からも本話は、『今昔物語集』卷三十一第二十八話、『俊頼髓脳』と同原拠より生まれた同話であると思われる。また本話は、『十抄抄』一—四十六を出典とし、『雑々集』第九話は、本話と同文的同話である。

◇58 後一条院生まれさせ給ふ時の事◇

今は昔、後一条院生まれさせ給ふ時、上東門院、事外に悩ませ給ひければ、御堂の入道殿、騒がせ給ひて、御前より御障子を開けて、走り出させ給ふて「こはいかゝすべき。御誦経など重ねてすべき」と仰せられる。御詞「いまだ終はらざるに、勘解野相公有国卿、いまだ若かりける。御、申ていはく。「御産は既に成り候たる也。かさねて誦経に及ぶべからず」と申程に、女房走り参りて、「御産すでに成りぬ」と申けり。事果て、後、有国を召して「いかにして御産成りぬとは知りけるぞ」と問はせ給ふ。「障子は子をさふと書いて候に、広く開きて候なれば、御産成りぬと存じて申つる」と也

〔校異〕 1 今は昔—いまはむかし底渡多坊伴竹いまハむかし葉今ハむかし土 2 生まれ—生まれ土葉 3 事外に—事外に伴殊外に土 4 悩ませ—なやませ宇 5 御堂の入道殿—御堂ノ入道との土御堂ノ入道殿坊 6 騒がせ給ひて—さはがせ給ひて底渡土葉坊伴竹さハがせ給ひて多さはがせ給て公 7 御前—御まへ土 8 開けて—あけて宇 9 走り出させ給ふて—はしり出させ給ふて底渡多土坊竹はしりいでさせ給ふて公葉伴 10 こは—こハ底渡多公葉坊伴 11 重ねて—かさねて宇 12 仰せられける—仰せられける底渡公土葉坊竹仰せられけり多竹 13 御詞—御詞底渡 14 終らざるに—おはらざるに底渡多土坊伴竹おハしざるに葉 15 勘解野相公有国卿—勘解野相公有国卿底渡 16 若かりける—わかかりける宇 17 御産は—御産ハ底渡竹御産ハ多公土葉坊伴 18 既に成り候たる也—既になり候たる也底渡多公葉坊竹すでに成候たる也土既になり候たる也伴 19 誦経に及ぶべからず—誦経におよぶべからず底渡誦経におよぶべからず多公葉坊伴竹誦経に及ぶべからず土 20 女房走り参りて—女房はしりまいりて底渡多土伴竹女房はしり参りて公葉坊 21 成りぬ—なりぬ底渡多公葉坊伴竹成りぬ土 22 事果て、—事はて、宇 23 有国を召して—有国をめして底渡多土葉竹「も」をミセケチし「を」と訂正伴有国を召て公坊 24 成りぬ—なりぬ底渡多土葉伴竹成ぬ公坊 25 知りけるぞとは—知けるぞとハ底渡公坊竹知けるぞとは葉伴しりけるぞとハ土しりけるぞとハ多 26 障子は子をさふと書いて候に—障子ハ子をさふとて書いて候に底渡伴障子ハ子さふと書て候に多竹障子ハ子さふと書て候に多障子ハ子さふとかきて候に公葉坊障子ハ子さふとかきてさふらふに土 27 広く開きて候なれば—ひろくあきて候なれば底渡土伴ひろくあきて候なれば多公葉竹ひろくあきて候なれば坊 28 成りぬ—なりぬ宇 29 存じて—ぞんじて底

渡公葉坊伴竹そんして多土

〔通釈〕今は昔、後一条院が御生まれになる時に、御母上の上東門院は、大変な難産でお悩みになられたので、父君の御堂入道殿は、あわてられた。御前から御障子を開けて、走り出てこられ、「どうすべきだろうか。御誦経を重ねてすべきだ。」と仰せられた。その御堂入道殿の御言葉が終わらないうちに、勘解野相公有国卿がまだ若かったころだったが、「御産は終わっておられます。重ねて御誦経は必要ありません。」と申し上げている間に、女房が走り来て「御出産になりました。」と申し上げた。事が落ち着いた後、有国を呼び、「どうして出産が終わったとわかったのか。」と尋ねると「障子は、子を障げると書きますが、障子が広く開いていましたので御産が終わったと存じて申し上げました。」ということである。

〔語釈〕○後一条院 第六十八代後一条天皇。諱は敦成、寛弘五年（一〇〇八）九月十一日生まれ長久九年（一〇三六）に二十九歳で崩御した。長和五年（一〇一六）二月即位し、長久九年（一〇三六）までの在位二十一年間。一条天皇第二皇子、母は、藤原彰子。○上東門院 一条天皇中宮、藤原彰子の院号。万寿三年（一〇二六）正月十九日に出家。○御堂の入道殿 道長出家は『日本紀略』寛仁三年三月条に「廿一日、戊寅、前太政大臣従一位藤原朝臣道長落饒入道（五十四、法名行観、後改行覚）、依胸病也、戒師法印院源、剃御頭律師定基」とあり、他に『小右記』『大鏡』（太政大臣道長上）にもある。○騒がせ給ひて 敦成親王出産時、物の怪が出現し難産であった。中宮御産所に物の怪出現で中宮に憑いたものけを追出し、寄りましに駆り移し、それぞれ一人ずつ分担した僧ごとに加持をするなどして大騒ぎをしている記事がある（『栄

花物語』巻八 はつはな。「左武衛示送サレテ云フ、丑ノ刻バカリ宮ヨリ退出す。已に御産氣無シ、但シ邪氣出デ来ルト」（『御産部類記』）○勘解野相公有国 藤原有国 父は輔道、母は、源俊の女。文章生出身で、東宮雑色から播磨・越後などの地方官、藏人頭、勘解由長官、太宰大式を勤めた。道長の家司として政界と詩壇に重きをなした。一条朝の漢詩人（『本朝麗藻』に収録）であり、代表的公卿の一人でもある（『続本朝往生伝』）。

〔参考〕 本話と『十訓抄』一一二十一『古事談』三十七『本朝語園』（巻一有国障子）『醍源鈔』十二は、同文的同話である。しかし、『古事談』以外は、有国が「いまだ若かりける時」の部分があるが、『古事談』には見られない。実際、後一条天皇御誕生の寛弘五年（一〇〇八）は、九四三年生まれの有国は、六十六歳であり、若くはない。この部分は、有国の実像を離れ、有能な人物として有国像の形成が増幅生成される段階で付加されたものである。本話は、『十訓抄』をそのまま受け継いでいる。

◇59 清少納言御簾を掲げる事◇

今は昔、一条院の御時、雪いとおもしろく降りたりける朝。端近く出でさせ給ひて。雪御覧じけるに。「香爐峯のありさま。いかならん」と仰られければ清少納言御前にありしが申ことなくて。御簾を押しはりたりけり。世の末まで。優なるために言ひ伝へられける。

彼の香爐峯の事は楽天、老の後、此山に一つの草堂をしめて住みける時の詩に云、

遺愛寺鐘 敬 枕 聴

香爐峯 雪 撥 簾 看

とあるを、御門仰出されるにより、御簾をばあげける也。

此清少納言は、天歴の御時、梨壺の五人の歌仙なりし清原元輔23(むすめ)女にて、大和ことばも家の風吹き伝へたりける上、心さま、わりなく優25にて折につけてたる振舞、いみじき事おほかりけり。

〔校異〕 1 今は昔―いまはむかし底渡多公伴竹いまハむかし坊今ハむかし土葉 2 御時―御とき土 3 降りたりける―降ふりたりける底渡降

―はし近く出させ底渡多公土坊伴竹はしちかくいてさせ葉 5 御覧じ―御らんし公土葉坊御覧し多竹 6 香爐峯のありさま―香爐峯のあり

さま底香爐峯のありさまま渡香爐峯の有さまま土香爐峯のありさま多公葉坊伴竹 7 ければ―ければ底渡公土葉坊けれハ多竹ければ伴 8 ありしが―有りしか土有りしが葉ありしか竹 9 御簾―御簾底渡土葉

10 押しはかりたり―をしはかりたりけり底渡多公坊おしはかりたり土葉竹をしはかりたりける伴 11 優なる―ゆうなる宇 12 言ひ伝へられける―いひつたへられける宇 13 彼の―彼ノ底渡竹かの多土「彼」をミセケチ「後」と訂正葉 14 香爐峯の事は―香爐峯の事ハ宇

15 山に一つ―山に―底渡公伴竹山に一つ多山にひとつ葉坊やまにひとつ土 16 しめて住みける時―しめて住ける時底渡多公伴竹坊「に」をミセケチ「て」と訂正坊しめて住けるとき土しめてすミける時葉

17 詩に云―詩ニ云底渡多葉公伴竹詩ニいはく土 18 遺愛寺鐘イアイジノカネハツハタテ、 枕マクラ聴キ 香爐峯カウロホウユキハカケテスレラミル 雪ユキ 撥ハク 簾レン 看ミル―遺愛寺鐘イアイジノカネハツハタテ、 枕マクラ聴キ 香爐峯カウロホウユキハカケテスレラミル 雪ユキ 撥ハク 簾レン 看ミル 土葉坊伴遺愛寺鐘ツツキ 欲ホシ 枕マクラ聴キ 香爐峯カウロホウユキハカケテスレラミル 雪ユキ 撥ハク 簾レン 看ミル 多遺愛寺鐘オホイアイジノカネハツハタテ、 欲ホシ

20 御簾をば―御簾をバ底渡公伴御簾をハ多土葉坊竹「を」ミセケチし

再度「を」と訂正伴 21 清少納言は―清少納言ハ底渡多公坊伴

22 なりし―也し底多「し」を書き入れ右傍に「歟」とある多也渡公土葉坊伴竹「也」に「なる」と傍書渡 23 女―女むすめ底渡公葉伴娘土 24 家の風吹き伝へたりける上―家の風吹つたへたりけるうへ底渡多公土坊伴竹家の風ふきつたへたりけるうへ葉 25 優にて―ゆうにて宇 26 いみじき事―いみじき事底渡多公土坊伴竹いみじきこと葉 27 けり―け

る多

〔通釈〕 今は昔、一条院の御代に雪がとても美しく降り積もった朝、端近くにお出ましになり、雪を御覧になられた折、「香爐峯の雪の様子はどんなだろうか」と仰せられたので、御前に控えていた清少納言は、だまつて御簾を巻き上げた。このことは、後世まで風流な手本と言ひ伝えられている。

この香爐峯の事は、白楽天が年をとつて、山の麓に一つの草庵を建て住んでいた時の詩に

遺愛寺の鐘の音は、枕を持ち上げて高くして聴き、香爐峯の雪は、簾を巻き上げて眺める

とある。このことを帝がお尋ねになったので、清少納言は御簾を巻き上げたのである。

この清少納言は、村上天皇の御代の梨壺の五人の歌仙の一人、清原元輔の娘である。和歌も代々伝わる清原家の学問の家風を受け継ぎ、ころざまが格別優雅で時に応じた振る舞いがみごとくな事が多かった。

〔語釈〕 ○一条院の御時 一条天皇 諱は懐仁、天元三年(九八〇)生れ、寛弘八年(一〇〇〇)に三十二歳で没。円融天皇第一皇子。母は、東

三条女院詮子、藤原兼家女。在位期間は、寛和二年（九八六）から寛弘八年（一〇一一）まで、道長を中心とした藤原氏最盛期である。位につかせ給ふ年とすると寛和二年のこととなる。○香爐峯 江西省廬山の北峰。○清少納言 生没年不明。父は、清原元輔。橘則光と結婚して則長をもうけるが、離別する。一条天皇の正暦年中に中宮定子に仕え、和漢の学識に富み、機敏な才能を發揮して後宮サロンの花形となった。公卿殿上人文人たちとの興隆でその才知を披露し優雅を競った。長保二年（一一〇〇）に定子は崩じ、少納言も後宮を去ったようだ。三十六歌仙の一人であり、『枕草子』『清少納言歌集』がある。○楽天老 白楽天○遺愛寺鐘歌枕聴 香爐峯雪撥簾看 『白氏文集』第十六「香爐峯下に新たに山居を下し、草堂初めて成る。偶東の壁に題す」五首の内の第四首。『和漢朗詠集』にも収録。○梨壺の五人の歌仙 天曆五年（九五二）十月、村上天皇の勅命で梨壺（昭陽舎）に撰和歌所が設けられた。別当に藤原伊尹寄人に大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城が任命された。○清原元輔 延喜八年（九〇八）生まれ、永祚二年（九九〇）に八十三歳で没す。深養父の孫、父は清原春光。清少納言の父。河内少掾、少監と低いが、歌人としては、天曆五年撰和歌所の寄人に選ばれ、万葉集読解と後選集選集従事した。三十六歌仙の一人で『元輔集』がある。

〔参考〕 清少納言の機知譚は『世継物語』第二十三話・第二十四話等にも見られる。本話は、『枕草子』二八〇段と同話であり、『十訓抄』一一二一『悦目抄』『本朝語園』〈巻四清少納言捲簾〉『體源鈔』十二末『女郎花物語』五十二は同文的同話である。『枕草子』では、定子とのエピソードであるが、『十訓抄』『本朝語園』『體源鈔』『女郎花物語』では、はつきりと一条天皇と清少納言との逸話となり、『御門仰出されるによ

り、御簾をばあげける也』の一文の付加によって『枕草子』二八〇段の定子皇后と清少納言の有名な逸話は消滅した。

◇60后宮（彰子）の女房萤を見て和歌を詠む事◇

今は昔、¹一条院の御時、²或殿上人水無月³廿日⁴あまり、いと暗きに、后宮に参りて、⁵馬道にた、⁶ずみけるに、⁷上より人の音のあまたして来たりければ、⁹さりげなく引き隠れて、¹⁰のぞきけるに、¹¹壺の遣水に、¹²萤のおほくすだくを見て、¹³先なる女房「ゆかしき萤かな。¹⁴集めたるやうにして見ゆれ」とて過ぐるに、¹⁵次なる人、¹⁶優なる声にて、「¹⁷萤火乱飛」と口ずさみけり。また次なる、「夕殿に萤飛んで」とうち詠む。しりなる人、「隠れぬ物は夏虫の」と、¹⁸はなやかにひとりごちたりけり。とり／＼やさしくおもしろくて、¹⁹此男なるといふ一ふしもなからんが本意なくて、²⁰ねずなきをし出したければ、²¹先なる女房、「物おそろしや。萤にも声のありけるよ」とて、²²つや／＼さはぎたる景色もなく、²³うちしめりたる空おほめきの程、²⁴あまりに色深くなしう覚へけるに、²⁵今ひとり、「なく虫よりもこそ思ひしに」と、²⁶取りなしたりける。是また思ひ入りたるほど、²⁷堪へがたくおくゆかしかりけり。まことにとり／＼にやさしく覚へける。此心は²⁸

音もせてみさほにもゆる萤こそ鳴虫よりも哀れなりけれ²⁹

〔校異〕 1 今は昔—いまはむかし底渡公伴竹今ハむかし土いまハむかし葉坊いまは昔多 2 一条院の御時—一条院御時葉坊一条院のとき土 3 水無月—水無月底渡みな月土 4 暗き—くらき宇 5 参りて—まいりて底渡公葉坊伴竹まゐりて土 6 馬道にた、ずみけるに—めんたうにた、ずみけるに底渡公葉めんだうにた、ずみけるに多伴竹めん

とうにたゝずミけるに土 7 上―うへ渡多公葉坊伴うゑ土「后宮」ミセケチし「うへ」と訂正竹 8 来たりければ―来りけれハ底渡多公土葉坊竹来りければ伴 9 さりげなく―さりけなく公さりげなく「か」ミセケチし「り」と訂正葉 10 引き隠れて―ひきかくれて底渡多公葉坊竹引かくれて土 11 壺の遣水―つぼのやり水宇 12 すだく―すたく底渡多公土葉坊竹 13 見て―ミテ葉 14 先なる―さきなる宇 15 集めたる―集たる底渡土伴あつめたる公葉坊 16 見ゆれ―ミゆれ底渡多公土葉坊伴竹 17 過ぐるに―すぎるに底渡多公葉坊伴竹過るに土 18 優なる声―ゆふなるこゑ底渡多伴竹ゆふなる声公土葉坊 19 螢火乱ケイカミツトウ飛と―螢火乱ケイカミツトウ飛底渡螢火乱と多土竹螢火ミタレ飛と葉坊螢火乱飛と伴 20 口ずさみ―口ずさミ底渡多公土葉坊伴竹 21 飛んで―飛で底伴竹飛で渡多公土葉坊 22 うち詠む―うちながむ底渡多公土葉坊伴竹 23 隠れぬ物は夏虫の―かくれぬ物ハ夏虫の底渡多公葉坊伴竹かくれぬ物は夏むしの土 24 けり―ける土 25 とり／＼―取／＼土 26 おもしろくて―おもしろくし「し」ミセケリをして「て」と訂正坊 27 なからんが―なからむか葉なからむが伴なからんか土 28 本意―ほい宇 29 ねずなき―ねつなき土葉ねづなき「つ」にミセケチし「す歟」とある多 30 出したりければ―出たりけれバ底渡出たりけれハ多公土葉坊竹 31 先なる女房―さきなる女房宇 32 物おそろし―物をそろし底多公坊物おそろし「を」ミセケチし、「お」と訂正渡ものをそろし渡ものをそろし土 33 ありけるよ―有けるよ公土有よ葉 34 うちしめりたる―打しめりたる土 35 おほめき―おほめき葉 36 あまり―餘りに土 37 色深く―色ふかく底渡多公土伴竹 38 覚へけるに―覚けるに底渡多公葉坊伴竹おほへけるに土 39 思ひしに―おもひし

に宇 40 取りなし―取なし底渡多公葉坊伴竹とりなし土 41 思ひ入りたる―おもひ入たる多公土葉 42 堪へがたく―堪がたく底渡多公葉坊伴竹たへがたく土 43 まことに―誠に土葉 44 覚へける―覚ける底渡多公葉坊伴竹おほへける土 45 心は―心ハ底渡多土葉坊伴竹ころは公 46 音もせで―音もせて多公葉坊竹音もせて土 47 みさほにもゆる―みさほにもゆる底渡多公葉坊竹みさほにみゆる土ミさほにミゆる伴 48 哀れなりけれ―あはれ也けれ底渡多竹「けり」の所ミセケチ「けれ」伴あはれ也けり葉哀れ也けれ公哀也けり土坊

「通釈」今は昔。一条院の御時、或殿上人が、六月廿日すぎのたいそう暗い夜、後の御殿に参上して、馬道の所にたたずんでいた。御前から人の足音がたくさん聞こえてきたので、何気ない風で物陰に隠れて覗いていた。坪庭の遣り水の所に螢が多く群がっているのを見て、先頭の女房が「大変な螢ですね。まるで集めように見える」と言つて通り過ぎて行く。次に来た女房は、上品な声で「螢火乱れ飛んで」と口ずさんでいた。三人目の女房は、「夕殿に螢飛んで」と詠じる。最後の女房は、「隠れぬ物は夏虫の」とはつきりとひとりごとを言う。それぞれ優雅で趣き深く、殿上人は、何かしら一節もないのが残念に思い、ねず鳴きをしてみせたのである。先頭にいた女房は、「恐ろしい。螢に声があつたわよ」と言つて、少しも驚いた様子もなく落ち着いて素知らぬ風をして取り合わな。もう一人は、「なく虫よりも黙つて燃えている螢の方が良いと思つていますのに」とその場を取り繕つた。これはまた深い思いのほどが、たまらなく奥ゆかしかった。本当にどの女房もみな優雅に思われた。「なく虫よりも」の意味は、

声を出して鳴く虫よりも黙つて燃える螢の方がずっと趣深いもので

あります。
というのである。

『語釈』 ○水無月 陰曆六月。○后宮 後の御殿 ○馬道 厚板を敷きわたくし廊下のように通行するようにした所。取り外して馬を乗り入れる通路とした。○坪の遣水 坪庭の中を流れる小川。○すだく 多く集まる。○ゆかしき どんな様子が見たい、知りたい。「ゆかしき螢かな」は、『今物語』には見えない。○螢火乱飛 この句は、元愼「夜坐」雨滞更愁南瘴毒 月明兼喜北風涼 古城樓影橫空館 湿地虫声遶暗廊 螢火乱飛秋已近 星辰早沒夜初長 孩提万里何時 狼藉家書滿臥床」(『全唐詩』卷一四五元愼二〇)にみえ、『和漢朗詠集上 夏』に「螢火乱飛んで秋已に近し 辰星早く没して夜初めて長し」と引く。○夕殿に螢飛んで この句は、白楽天「長根歌：夕殿螢飛思悄然 孤灯挑尽未成眠 遲遲鐘鼓初長夜 耿耿星河欲曙天」(『白氏文集』十二・感傷四)にみえ、『和漢朗詠集下 恋』に「夕殿に螢飛んで思ひ悄然たり 秋の燈挑げ盡してはまだ眠ることあたわず」と引く。また『源氏物語 幻』に「螢のいとおほうとびちがふも、夕殿に螢とんでと例のふるごとにもかかるすぢのみ口なれ給へり」とある。『十訓抄』、『悦目抄』、『今物語』にも宮にたたずむうちに「夕殿に螢飛んで」とある。○隠れぬ物は夏虫の「桂のみこの螢を捕へてといひ侍りければ童のかざみの袖につつみて包めども隠れぬ物は夏虫の身より余れる思ひなりけり」(『後選和歌集』卷四夏二〇九番読人しらす)とあり、また歌は、『古来風体抄』『近代秀歌』にも引き、この歌説話は、『大和物語』四〇段、『世継物語』第十話『十訓抄』第十一―四〇にみえる。包んでも隠しきれないものは、螢の身からでる火でございます。螢のように、胸に隠しきれない私の恋しい思い

の火でございますとの激しい恋情を示している。「夏虫」とは螢である。○はなやかに はなのようにはつきりと美しい様。○本意なくて 意志にそむく。○ねずなき ねずみの鳴き声に似た音を出す。人を密かによんだり、遊女が客を呼び入れようとするときなどにする。○つやつや打ち消しを伴って全く。少しも。○うちしめりたる しんみりした。○空おほめく 物さだかでないこと。空とほけをする。素知らぬふうをする。○なく虫よりもとこそ思ひしに 声を出して鳴く虫よりも黙って燃える螢の方がずっと趣深いものである。話末の「音もせてみさほにもゆる螢こそ鳴虫よりも哀れなれけれ」の歌を指す。○「音もせて」の歌『重之集』・『後拾遺集』卷三 夏 二一六番 源重之の「螢をよみ侍りける」の詞書きである。第二句は、当該話と違い、「思ひにもゆる」とある。みさほは、「操」、心を変えず、光り続ける螢の光を指す。

【参考】 本話は、『十訓抄』一一十五話を典故とし、『今物語』卷四「悦目抄」『體源鈔』二上「十訓抄」一一五と同文的同話である。本話の骨旨は、女房たちが、和漢の秀句を口ずさみ、ねず鳴きにも動じないで優美に取りなす女房たちの振る舞いを激讚した話である。『悦目抄』、『體源鈔』文末にある「此の五人の女房は、一人は、天歴の御時、梨壺の五人の歌仙の中に、清原元輔の女、清少納言と云ふ者也。一人は其比源氏物がたり作れる紫式部、並びに赤染衛門、伊勢大輔、和泉式部、馬内侍など聞ゆる人々也。いと取り／＼に心有りて優なる人ども也。」の部分は、本話、『十訓抄』、『今物語』の文末には見当らない。この具体的な人名が付記された部分は、元来は、付帯していなかった話が、原型であり、後に具体的人名が付加されて、清少納言、紫式部、赤染衛門、伊勢大輔、和泉式部、馬内侍等の王朝才媛の称讚譚が形成されたと推測

する。

【注】

- (1) 小内一明「小世継物語伝本考（一）」宇治大納言系統の成立―『大東文化大学紀要・文学部』昭和44年2月・高木浩明「『世継物語』の伝本について（二）」宇治大納言物語系統諸本解題―『二松学舎大学人文論叢』第50号平成5年3月）に宇治大納言物語系統諸伝本について、詳細な伝本紹介・その系譜についてのご考察がある。
- (2) 宇治大納言系統本の本文については、注（1）の小内一明氏の御論考と拙稿「世継物語について（一）」（『国文目白』第16号昭和52年2月）を参照されたい。